



自重知らずの

転生貴族は、現代知識チートで

どんどん商品を

開発していきます!

◆著 潮ノ海月

◆絵 たき



登場人物紹介

アグウェル

珍しいものを作るシオンの噂を聞きつけ、仕官してきたアークデーモン。

リムル

自由奔放なサキュバス。
アグウェルの娘で、シオンに惚れこんでいる。

オルデン

商業ギルドでシオンと仲良くなったダルシアン王国の商人。

マリナ・ナブラスト

幼いが、ナブラスト王国の女王。
歳のわりに大人びている。

フィーネ・ブリタニス

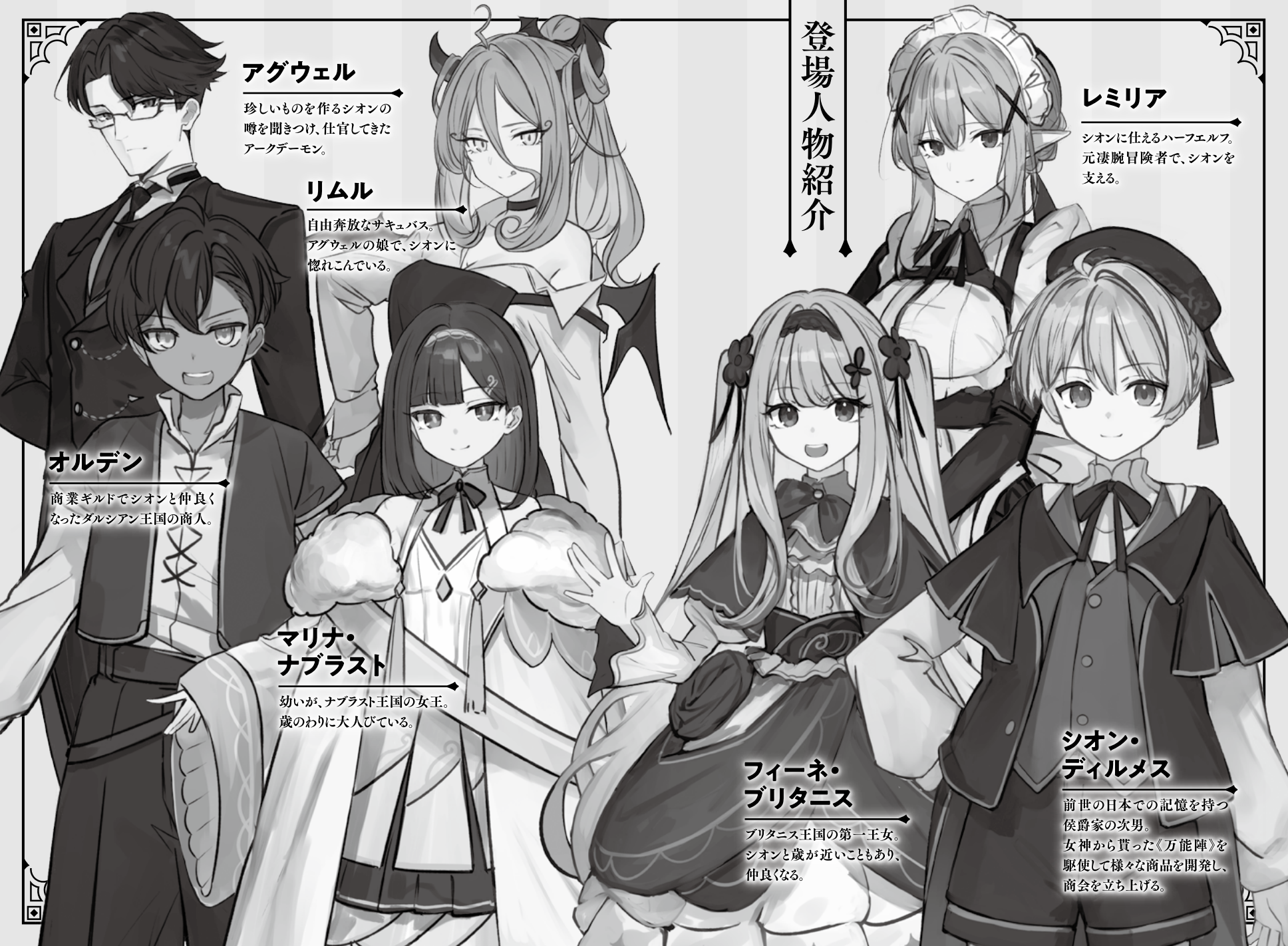
ブリタニス王国の第一王女。
シオンと歳が近いこともあり、仲良くなる。

レミリア

シオンに仕えるハーフェルフ。
元凄腕冒険者で、シオンを支える。

シオン・ディルメス

前世の日本での記憶を持つ侯爵家の次男。
女神から貰った〈万能陣〉を駆使して様々な商品を開発し、商會を立ち上げる。



第1話 女神との会話、そして転生

俺は気づくと、真つ暗闇の中にいた。

体の感覚はなく、自分の目が開いているかどうかもわからない。

そこで俺はハッと気づいた……自分は死んだのだと……

大学を卒業してから、中堅企業に就職し、たまの休みの日にはアニメを観て、ゲームをし、ラノベを読む、ささやかな独身生活。

自分の人生に何の展望もなかったけど、自分なりに楽しく暮らしていたんだよな……

でも今思えば、もっと色々な場所へ旅行がしたかった……もっと豪華な料理も食べたかった……それに一度くらい恋愛というものを経験したかったな。

どうして死んだのかも、妙にはつきりと覚えている。

まさか焼きマシユマロを口一杯に頬張っている最中に喉に詰まらせるなんて……そして、そのことでパニックになり、心臓発作を引き起こすとは思わなかった。

マンションの部屋で俺の死体を発見した人は、いったいどんなリアクションを取ったのだろうか。「それはもう、何をやってるんだって感じで、駆けつけた救急隊員の皆さんも呆れていたわね」

物思いに耽^{ふけ}っている俺の近くから、突然、鈴の音のような綺麗な声^{きれいなこゑ}が聞こえてきた。

その声に驚いた瞬間——

視界が切り替わり、気づくと神殿のような建物の中にいた。

柱の外側は、真っ白な空間がどこまでも広がっている。

手足の感覚はあるのだが、物理的な肉体があるようには見えない。

霊体のような状態なのだろうか。

目の前に視線を向けると、キラキラ光る豪華な椅子^{いす}に座る、光り輝く女性が笑いながら涙を流している。

「笑ってごめんなさいね。でも、日頃からの不摂生^{ふせつせい}が原因とはいえ、まさか焼きマシユマロを喉に詰まらせているタイミングで、心臓発作^{しんざうはつさく}が起きるなんて運が悪かったわよね」

「あなたは誰ですか？」

「見てわからないかな。私はあなた達の住んでいた世界とは違う異世界——エクストリアという世界の女神よ。ほら、全身が光り輝いてるでしょ」

そういえば透き通った肌がキラキラと輝いている。

……こんな人間がいたら、真っ暗な夜でも明るそうだな。

「今、変なこと考えませんでした？」

「いえ……それでいい俺に何の用ですか？」

「そのことを伝えに来たんですよ——おめでとうございます。厳正な抽選の結果、あなたはエクストリア世界に転生することになりました。パチパチパチパチ。剣と魔法の世界ですよ。魔獣やドラゴンだっています。夢の異世界ですよ。よかったですね」

……よくわからないけど、エクストリア世界という異世界へ転生できるみたいだな。

これが現実の世界だったら、^{あちて}新手の詐欺か、^{えいせ}似非宗教の勧誘を疑うところだよ。

というか抽選で異世界に行く転生者を決めていいの女神よ……さっきまでのやり取りで、いい加減にしか感じられないのだけ……

「また変なこと考えませんでした？」

「そんなことはないですよ。それでエクストリアの世界って、どんな世界なんですか？」

せっかく転生できるのだから、事前に情報を集めておくことは重要だよね。

その情報によって生き方を考えないといけないからさ。

全身がピカピカと輝いているから、微妙な表情まではわからないけど、女神は何やら言い淀^{よど}んでいる。

「実は……五百年ほど前に魔王が魔族や魔獣を従えて、世界を支配しようとした時期がありました。その時は日本から転移した勇者が、魔王を討ち滅ぼして、それは阻止されたのですが」

それは俺が読んでいたラノベでもよくあるパターンだ。ファンタジー小説の定番といってもいい。言いにくそうにしているが、その後のことが気になるんだけど……

「それで世界が荒廃してしまい、今は人族が世界の大半を支配しているんですが、安定した大国がないんです。少し大きな国が栄えても、外敵がいないので、すぐに他の国々からの攻撃が集中してしまい……それで文明も経済も発展しない有様ありさまで。それで、異世界転生なんかに馴染みがある人に転生してもらって、刺激を与えてもらおうと思いまして」

厳正な抽選って言ってたけど、大嘘おかしなじゃないか！

でも確かに、異世界転生がテーマのアニメやラノベを読んでいた俺は、女神の言う通りの人材かもしれない。

それに女神の説明をまとめてみると、今のエクストリア世界って、昔の日本の戦国時代に似た状態になっている気がする。

「そんな世界に平和ボケした日本人である俺が転生したところで、すぐに殺されるような気がするけど……」

「どうして、そうネガティブなのですか？ 日本人の悪い癖ですよ。もっとポジティブに生きないと、人生はどんなことが起こるか分からないんですから。気軽に転生してくれたらいいんです」

「普通の人間だからね、その世界は危険そうじゃないか」

「何の能力もなく、いきなり転生させて放り出すことはしませんよ。これでも一応は女神なんですから、どんな恩恵でも与えられます。さあ、望みがあるなら素直に何でも言ってみてください」

「それならお金をくれ。一生、めっちゃくちゃ散財しても尽きることのない莫大ばつぱなお金を」

そう……お金さえあれば、俺が危険に身をさらす必要がない。

小さい島を買って、可愛くて綺麗なメイド女子を雇って、毎日イチャイチャすることも夢ではないだろう。

戦いについては戦闘に長けた人を雇えばいいし、あるいは資金だけ出して誰かに商売をさせてもいい。

そう思った俺の希望に、今まで両手を広げて意気揚々と語っていた女神の動きがピタリと止まる。「怠惰たいだは大罪ですよ。怠ける者食うべからずです。お金は働いてきちんと自分で稼ぐもの。それに他人に頼り切るのもダメです。そんな要望は女神として許せません」

さっきは何でもいって言ったじゃないか……

転生した最初の時点でまったく資金がなければ、できることもほとんどないだろう。

「あーあ、それならどこかの田舎に引っ込んでスローライフでも送ろうかな」

「ちよっと待ってください。それでは世界に刺激を与えられないではないですか。資金のことはキチンと考慮しますからヘソを曲げないでください」

光り輝く豪華な椅子から立ち上がってそう言った女神は、天に向かって両手をかかげる。すると真っ白な空に青白い巨大な魔法陣が現れ、そこから光の柱が一気に俺に下りてきた。

「もう、色々と説明するのが面倒臭くなってきました。今ので恩恵を授けたので、エクストリア世界へいってらっしゃーい」

「まだ何にも決まってるじゃないか。もう少し話し合おう……まだ、心の準備がああああ！」
こうして眩い光に包まれ、俺はエクストリア世界へと転生するのだった。

第2話 父上、ロンメル砦へ出発！

——エクストリアの世界へ転生して、九年が過ぎた。

「ここにおられたんですか。ダイナス様がお呼びです」

父上の書庫で本を漁っていた俺——ではなくて僕を、メイドのレミアが慌てた様子で捜しに来た。

ダイナス様とは僕の父上のことで、このブリタニス王国のデイルメス侯爵家の当主である。

そして僕はシオン・デイルメス、九歳。

侯爵家の次男というわけだ。

女神と話して光に呑まれた後、僕は気づいたら赤ちゃんになっていた。

そこからすくすくと育ち、今現在に至る。

この世界、エクストリアには、グランタリアという大きな大陸がある。

極東と呼ばれる東の地域には、南に向かってぶら下がるように伸びているラバネス半島があつて、

その先端部分に、僕達が住むブリタニス王国は位置している。

王国の南側と東側には海やちよつとした島しかないけど、地続きになっている北側と、西側の海の向こうには、幾つもの国が存在している。

特に北側には、トランスベル王国とナブラスト王国という二つの国があり、僕の転生したデイルメス侯爵家は、そのナブラスト王国と国境を接している地域を領地に行っているんだ。

僕達が住んでいるのは領都デイルスといって、近隣でも最も立派な町の一つと言われている。

ちなみに今僕を呼びに来たレミアは、僕が幼少の頃に、ひよんなことから僕の専属メイドになった、ハーフェルフの元冒険者だ。

常日頃はおしとやかなんだけど、元冒険者だけあつて、怒らせると怖い一面もあるんだよね。

そんなレミアと一緒に執務室へ行くと、大きくて豪華なデスクに座って、父上が難しい表情をしていた。

「シオンはどこにいた？」

「はい、いつものようにダイナス様の書庫におられました」

レミアの返事に、父上は溜息をつく。

「シオンよ、どうして外に出て剣の訓練をしないのだ。兄のアレンは三歳の頃から、玩具の木剣を持つて騎士の真似事をして外で遊んでいたぞ」

「父上、僕の体を見てください。木剣を振り回せるように見えますか？」

僕は胸を張って、片手で自分の細い腕と脚を指差す。

僕も男子だし、このファンタジーな世界で勇者みたいに活躍したいという夢も、五歳の頃まではあったけどね。

しかし、いざ木剣を持って訓練をしてみると、運動神経は人並み程度だった。

……あの女神様は、まったく身体能力を向上させてくれなかったらしい。

それに、元々、前世でも運動が苦手だったこともあり、僕が読書に逃げ込んだのは仕方ないことだと思う。

そんな僕の様子を見て、父上は片手で額を押さえる。

「そのようなひ弱な手足をしているから、少しは運動してはどうかと言ってるのだがな」
するとレミリアが静かに進み出る。

「どうやらシオン様は知性の方が先に成長しているのではないかと。今ではダイナス様の蔵書を理解されているようです」

「それは本当か……？ 子供が読めるような簡単な本は置いていなかったはずだが……」

レミリア、僕を庇^{なほ}ってくれてありがとう。

父上が不思議に思うのも無理はない。

だって生まれた時から成人並みの知識はあったからね。

赤ちゃんの頃は体も自由に動かせず、何もできなくて焦ったよ。

毎日、泣いて笑って乳母^{うほ}の母乳を飲んで、眠るばかりの生活に飽き飽きしていたし……だから僕は、幼少の頃から父上の蔵書を読みまくって文字を必死に覚えたんだ。

ゼロ歳から本をねだる赤ちゃんを気味悪がって、離乳食が始まった途端に、乳母を担当していたメイドが邸^{やしき}を去っていった時は、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになったけど。

でも、早くこの世界の知識を知りたかったし、文字の読み書きができなければ、それらを知ることができなかったからね。

今では、父上の蔵書を読んで理解するくらいは造作^{ぞうさく}もないのだ。

「それで何が面白かった？」

「地理の本ですね。グランタリア大陸の国々のことがよく書かれていましたから」

「あれは九歳の子供が読む本ではないぞ。やはりアレンとは違うのだな。子供の得意分野を伸ばすのも親の務めかもしれん」

そう言いながら、父上は満足そうに笑む。

僕には三歳年上のアレン兄上がいる。

頭もよくて武術にも秀でていて、僕の自慢の兄上だ。

そのアレン兄上は十二歳で、今は王都ブリタスにある別邸から、貴族学院に通っている。

月に一回、近況を封書で報告してくるのを僕も父上も楽しみにしていたりする。

どうやら機嫌が直ったららしい父上へ、僕はそっと片手を上げた。

「それで、お仕事中に僕を呼ばれるなんて、どうしたんですか？」

「そうであったな。ナブラスト王国軍がまた国境地帯を荒らしているらしいのだ。私はこれから領軍を率いて、国境地帯のロンメル砦へ向かう。いつもの小競り合いだろうから、そう長くはかからないはずだ。留守の間おとなしくしているのだぞ」

父上の蔵書で調べただけけど、女神様が言っていたように、今のグランタリア大陸は小さい国々が乱立していて、群雄割拠の状態にあるらしい。

ブリタニス王国と接しているトランスベル王国とナブラスト王国の二国は、何かとちょっかいをかけてくる……つまり、そこに領地を持つ我がデイルメス侯爵家の領地を狙ってだ。

今回の諍いも、その一環だろう。

武勇に秀でた父上が国境での小競り合いで危険にさらされるとは思えないけど、やはり少し心配だな。

国境付近に集まっているナブラスト王国軍の兵数はおよそ千人。

これまでであった衝突では、敵の兵数は五百人ほどだったから、数が倍になっている。

この規模だと、戦いが長引くかもしれないな。

それから三日後、父上はデイルメス侯爵軍八百人を率いて、領都デイルスを出発していった。

ロンメル砦には二百人の兵が常駐していて、その者達と合流してナブラスト王国軍を迎撃する予

定らしい。

父上が不在となった邸で、僕はそと扉を開けて、文官が仕事をしている執務室を覗いてみる。すると、木製のデスクの上に突っ伏して、執務長のジョルドがブツブツと弱音を吐いていた。

「ああ、ダイナス様が出陣されてしまうなんて、これから私が領都の管理をすることと思うと胃が痛い。私に執務長なんて役職は向いてないですよ」

デイルメス侯爵領には主要な町が六つあり、その町ごとに父上の臣下である下級貴族が管理しているのだけど、領地全体の管理と領都の運営は名目上、父上が行っている。

しかし、領主である父上は今回のように領都を留守にすることも多い。

その間は執務長のジョルドが受け持つことになる。

ジョルドは有能な文官ではあるけど、気が弱いところがあるから、父上が留守の間、彼を手伝って、僕も何か役に立てないかな。

父上が国境へ向かってから十日が過ぎた。

伝令の兵士の報告によると、ロンメル砦に入ったデイルメス侯爵軍とナブラスト王国軍はまだ睨み合いの状態が続いていて、本格的な戦いにはなっていないそうだ。

砦を攻撃するには守備兵の三倍の兵力が必要というから、ナブラスト王国軍も容易に動けないのかもしれない。

レミリアと一緒に執務室へ赴くと、机の上に積まれた書類を整理しているジョルドの姿があった。「平時でも忙しいのに、ナブラスト王国軍も迷惑な連中ですよ。戦となれば兵糧の確保、運搬、兵への備品の配給、報奨金、その他諸々の経費が……考えるだけでも頭が痛くなる」

「父上の領地って、そんなにお金に困ってるの？」

僕の声に気づいたジョルドは、書類から顔を上げて、驚いた表情で目を見開く。

「シオン様！ いえいえ、それほど困窮はしていませんが、戦争というのはとかく経費にかかる負担が大きいのです。今のところは資金不足ではありませんが、領地をもっと発展させるためには、ゆとりは欲しいところですね」

「それじゃあ、資金を稼ぐために何か作ってみようかな？」

「何かいい案があるのですか？」

「シオン様に不可能はありません」

なぜかレミリアが自慢気な表情で胸をブルンと張る。

彼女は何の根拠もなく言っている気がするが、実はそれは間違いではない。

そう……僕には女神様から貰った恩恵——その名も《万能陣》のスキルがあるのだ。

これは、僕がイメージした様々な効果を実現するという、独自の魔法陣を生み出せるスキルだ。具体的に何がどうなる、というイメージをしっかりと持ちつ必要があるけど、魔法陣に触れたものを、その効果通りに変化させることができる。

それも、化学法則をある程度無視できるというおまけつき。といっても、あくまでも僕がイメージできる範疇でしかない。たとえば、食べ物や五倍に増やすみたいな、無から有を生み出すのはできない。

そのイメージを固定させるために、魔法陣を描く必要があるのだ。

こんなチートなスキルを、女神様が何の代償もなく授けてくれたわけではない。

この肉体は平均並みだし、魔力量も人並み。それに魔法陣を使わないと、魔法が使えない。

この世界には基本となる、火、水、風、土、光、闇の六属性の魔法があり、その他にも無属性魔法などがあるんだけど……僕はそのどれもが使えないのだ。

父上にスキルのことを相談した時に、生身で魔法が使えないと報告したら、すごく残念そうな顔をされたのを覚えている。

父上からするとハズレスキルに思えたんだろうな。

それ以降、特訓をして剣術を覚えろ、と父上が口うるさくなったのは、僕のことを考えてのことなので仕方ないよね。

僕は以前から温めていた案をレミリアとジョルドに向けて発表することにした。

「領都では色々な用途で魔獣の素材を使っていたり、それ以外にも動物の食材を扱っていたりするでしょ。その骨を使って、陶器のような食器を作ろうと思うんだ」

「骨？ 魔獣の骨や動物の骨、魚の骨などですか？ それなら町にゴミが沢山ありますけど……そ

んな骨で陶器のような食器を作ることができるとですか？」

通常、骨は素材にも食材にもならないから捨てられている。

レミリアの疑問ももつともだろう。

「うん。たぶん僕のスキルなら作れるはずなんだ。一度、試してみたいから骨を集めて邸に運んできてほしい」

「それなら私が町へ行つてきます」

レミリアはニコリと微笑むと、ダッシュで邸を飛び出していく。

さすがは元冒険者なだけあって、行動力が半端ない。

それから一時間ほどで、彼女は背囊を担いで邸へ帰ってきた。

「ただいま戻りました。冒険者ギルドで魔獣を解体した後に残った骨を頂戴してきましたのですが」

その袋の中を見ると、沢山の骨が入っている。

「うん、それでいいよ。ありがとう」

この世界には様々な魔獣が生息していて、色々な素材が取れる。

魔獣の体内には、魔素が結晶となった魔石があり、その魔石は魔道具などのエネルギー源として取引されているのだ。

もちろんそれ以外に、毛皮や肉なんかも有効活用されている。

冒険者ギルドでは、魔獣の解体をしているから、骨が大量にゴミとして出るのだ。

さすがレミリア、いいところに目をつけたね。

「では早速、作業を始めようか」

床に広げた羊皮紙に、僕はペンで丁寧に魔法陣を描いていく。

僕のスキルである《万能陣》はひらがな、カタカナ、アルファベットの三つの文字を使って一つの魔法陣を描く。

このエクストリア世界の人々はエクストリア語を共通語としているから、ひらがな、カタカナ、アルファベットはわからない。

だから僕の描く魔法陣の内容を解析することは、この世界の誰にもできないんだ。

まずは中央に円形のスペースを空けておいて、その周りにひらがなで魔法陣を描き、その上からカタカナで魔法陣を描き、またその上からアルファベットで魔法陣を描いていく。

そして、中央のスペースに、マグカップの絵を描く。

今回の魔法陣に込めたのは、まずは、骨を粉々にする粉碎の効果。続けて素材の浄化を行い、中央に描かれた絵のように形を整え、綺麗な形に固め、陶器のように仕上げる効果だ。

強度やサイズについてもイメージしながら文字を描いているので、この辺りは細かく書き込まなくても大丈夫。

これで、魔法陣の上に置いたものを粉碎してマグカップを作る——【マグカップ】の魔法陣の完

成だ。

魔法陣が描かれている羊皮紙の上に骨を置いて、魔法陣の端に両手を添えて魔力を流す。すると魔法陣が光り出し、骨が空中へと浮かび上がった。

そしてクルクルと回転して粉末へと変化し、その粉が空中を回転しながら集まって、マグカップの形に変わっていく。

それを見たジョルドは喜びの声をあげた。

「なんと画期的なスキルなんでしょう」

一応、この世界に魔法陣の概念はあるんだけど、僕が使うような効果を持つものではなく、熱を発するとか光るとか、その程度のものだ。

それに比べたら、僕のスキルはかなり特別だよな。

ちなみに、僕がスキルで描いた魔法陣は、僕でなくても、魔力を流せば誰でも効果を発動することができる。

つまりこの実験が成功すれば、僕が魔法陣を量産して、他の誰かが魔力を流してマグカップを量産することができるというわけだ。

空中に浮かんでいたマグカップは、羊皮紙の上にそっと着地する。

「何とか、マグカップになったようだね」

魔法陣の上に完成した白いマグカップを手にとって、僕はニッコリと笑う。

真っ白なマグカップはピカピカと光沢があり、表面もツルツルで、強度も申し分ない。

これなら床に落としたとしても割れないだろう。

実験としては大成功でいいよね。

白いマグカップに満足した僕は、ジョルドに手渡す。

それを手で叩いたり、色々な角度から覗いたりと呼味したジョルドは、嬉々とした表情で頷いた。

「このクオリティなら、デイルメス侯爵領の特産物として十分に売り出せます。ほとんど白磁器と変わらないくらいですからね。これは画期的な商品になりますよ」

「それはもうシオン様が考案された商品ですから。当たり前前のことです」

だから、どうしてレミアアが自慢気なの？

それからレミアア、ジョルドと話し合い、僕の考案した骨を使った陶器は、『ボーン食器』と命名された。

そしてジョルドの提案で、邸の隣に簡易的な工場が建てられることになった。

器の種類も、底の深さを変えた皿を数種類、それとマグカップ、紅茶カップなどのコップ類や、フォーク、スプーンなども量産することにした。

これも【マグカップ】と同様に、【大皿】、【小皿】、【紅茶カップ】……など、幾つかの魔法陣を数枚ずつ描いておく。

ジョルドはすぐに大工職人を手配してくれて、二週間後には工場が完成した。こちらの準備は整ったので、後は人員だ。

魔法陣に骨を載せて魔力を通せばボーン食器になることを考えれば、すごく簡単な仕事だから、工員を集めるのも大変ではないと思っただけだ……

それでも一つ一つ商品を作る度に、魔法陣へ魔力を流す必要がある。毎日作業を続けていけば、魔力が枯渇して倒れる者が出てくるかもしれない。

そこで工場にある魔法陣は、魔力から魔力を抽出して魔法が発動するようにした。

これなら、小さな魔力を載せるだけで魔法陣が発動できるからね。

大量に魔力が必要だけど、小さな魔力はかなり価値が低いので、それほどコストは高くない。

あとは骨や魔力を魔法陣に載せて、魔力を流す人員が必要なんだけど……ジョルドとレミアと相談して、奴隷を雇うことになった。

この世界は、前世の日本のように治安がいいわけでもない。

信用できる者でなければ、魔法陣や商品を盗まれる可能性がある。

奴隷は奴隷紋という魔法契約による紋が体に刻まれている。

そして主人の命に背くと、全身に激痛が走る仕組みになっているのだ。

それによって主人に反抗することはできないし、嘘や隠し事もできないから防犯対策としては申し分ないんだよね。

前世の記憶を持つ僕としては、奴隷を使うのはちよつと躊躇ちゆうちよしてしまうのだけど、この工場ならば無理な働き方をさせることはないだろうと何とか自分を納得させた。

奴隷も集まり、ボーン食器の量産が始まったところで、僕は売り先について考えないといけないことに気づいた。

でもそこは、ジョルドが既に動いてくれていた。

彼はサンプルとなる商品を持って、商業ギルドと交渉しに行ってくれていたのだ。

結果として、我が家から商業ギルドに商品を納入し、ギルド経由で幾つかの商会に卸してもらい、試しに販売されることになった。

お試し販売ということで、店頭価格はこちらで決められるそうで、どれもおおよそ銀貨一枚——日本円にして千円ぐらいの値付けにしてある。

ボーン食器の材料は、元々捨てられていた部位なので、原価はタダ同然。

なのでかなり安く売ることも考えていたんだけど、白磁器に近い高品質のものを安価で市場に流せば混乱を起こすことになってしまう。

なので、それを避けるための値付けとなった。

ちなみに、各手数料を抜いて、僕達の手元に戻ってくるのは、三割程度だ。

さて、どれくらい売れるかな。

そんなこんなで、ボーン食器の販売を開始してから一カ月ほど。

ボーン食器は売れに売れ、まだ発売されてから間もないのに、既に領都全体に広がる勢いになっていた。

気をよくしたジョルドがボーン食器の店舗まで作ろうと言い出したくらいだ。

さすがにそれは難しいんじゃないか、なんて話をしているうちに、父上が領都デイルスに帰還してきた。

国境に現れたナブラスト王国軍を退け、ロンメル砦に兵を二百人残してきたという。

応接室に僕とジョルドを呼び出した父上は、大きなソファにゆったりと座って息を吐く。

「やはりナブラスト王国軍は本気で侵略してくるつもりはなかったようだ。国境での小競り合いで済んでよかった……さて、シオン、ジョルドよ。私が留守の間は何もなかったか？」

「聞いてください。シオン様が発明したボーン食器が領都デイルスで大好評となっています。この分ですと出兵にかかる費用を上回る利益が得られそうです」

俺が口を開く前に、ジョルドがニコニコと微笑みながら、手に持っていたボーン食器を父上に手渡した。

食器を手に取り、ジーツと見つめ、指でコツコツと叩いて硬さを確かめ、父上は難しい表情を浮かべる。

「木よりも硬いが、金属ではなさそうだな。この食器は何でできている？」

「骨です。廃材になっていた魔獣、動物、魚などの骨を粉末にして、魔法陣を用いて器に加工したものです」

僕はすぐにそう答える。

「これがゴミになる骨から加工した器だと……シオン、どこからそのようなアイデアを思いついたのだ？」

「僕のスキルのことはご存知ですよ。廃棄される予定のものを使えば、元手はタダ同然に、様々なものを作れるんじゃないかと思ひまして。それで稼いで、父上の力になればと考えたんです」

父上に見据えられた僕は、指をモジモジさせながら答える。

その様子を見た父上は、ハァーと大きく息をついた。

「どうやらシオンは商才がありそうだな……では、商業ギルドでシオンの商会を作ろう。この商品の利益は全て、シオンの商会のものとする。侯爵である私が息子に儲けさせてもらうなど、沽券こけんに関わるからな」

「でも……父上のためにボーン食器を作ったので……」

そう、僕がこうして商品を売ろうと思ったのは、少しでも沢山儲けて、父上の力になりたかったからだ。

しかし父上は首を横に振る。

「いずれ侯爵家はアレンが継ぐことになる。成人すればシオンは家を出て独立せねばならん。その時に少しでも資金があった方が将来の役に立つ。よって商品の利益はシオンのものだ」

父上はブリタニス王国の侯爵で大貴族だ。

九歳の息子が商品を開発したからといって、その利益を父上が受け取れば、他の貴族から要らぬことを言われ、あらぬ噂を立てられことにもなりかねない。

もし王国中にそんな噂が広まったら、父上は国中の笑いや者になる。

そこまで思考を働かせなかったのは僕のミスだな。

また何かの機会があったら、父上に協力しよう。

父上と話し合ってから三日後、僕の代理としてジョルドとレミアが商業ギルドへ赴き、『ロンメル商会』を設立した。

この商会の名前は、レミアが決めたんだよね。

ロンメル砦を守りに行く父上を僕が助けようとしたことから、この名前を考えついたそうだ。

父上の命を受け、ジョルドは領都デイルスに三つのロンメル商会の店舗を用意した。

そして一カ月後には、デイルメス侯爵領の主要な六つの町にもロンメル商会の店舗を用意し……ついにポーン食器は販売されることになった。

既に領都の庶民の間でポーン食器は流行となっていたこともあり、他の町でも飛ぶように売れ、

あつという間にデイルメス侯爵領内に浸透していった。

ロンメル商会は僕個人が所有する商会で、レミアが副会長として、僕の代わりに業務を行ってくれることになった。

僕はあくまでもまだ九歳の貴族家次男。実務なんてできるわけがない。

ホントはジョルドに副会長になってほしかったんだけど、彼は父上の片腕なのでそこまでの協力を得ることはできなかった。

領内でポーン食器を売り始めて三カ月後、デイルメス侯爵家の邸に、周辺の諸侯達が頻繁に訪問してくるようになった。

その目的はどれも、ポーン食器を安く卸してほしいというものだった。

諸侯の相手をしなければいけない父上は、段々と疲労の色を濃くしていく。

そんなある日、僕とレミアは、父上の執務室へ呼び出された。

部屋に入ると、豪華なデスクに座る父上が、真剣な表情で真っ白なマグカップを持っていた。

「ただ白だけの食器と思っていたが、こんなにも流行るとはな。これは私の予想を上回る大変な事態になるかもしれん」

「どういうことでしょうか？」

父上の言葉の意図がわからず、僕は首を傾げる。

するとエミリアがニッコリと笑って、推測を披露してくれた。

「ボーン食器の販路については全て記憶していますので、私から説明を……この勢いですと、ボーン食器の売れ行きは、ブリタニス王国南部の全てに広がるでしょう。ダイナス様はそのことについてご懸念があるのかと」

「レミアアの予想通りだ。事はそれだけではないぞ。もしかすると、王城から呼び出しがあるかもしれない。もしもの時はシオンも王城に同行することになるから、そのつもりで心の準備をしておくように」

父上にそう告げられた僕とレミアアは、二人で自室へと戻った。

ちよつとデイルメス侯爵領の資金繰りを改善しようとしただけなのに、どうしてこんな大事おぼろになるんだよ……

確かに領内で流行っているとは思っていたけど、まさか王城まで話が行くほどなんて考えてもみなかったな。

しかし、父上が王都へ行くとなると、多くの兵士を率いて登城しなくちゃならない。

そうならばまた遠征の出費がかさむ。

それでなくても、ナブラスト王国との国境での戦いで、出費が膨らんでいるのだ。

僕が引き起こした騒動で、父上に迷惑をかけるのは申し訳ない。

そこまで考え、僕はあることを思いついた。

《万能陣》で、試してみたいことがあったのだ。

急いで机の上に置いてあったインクとペンを手に取り、大きな姿見の前に立ち、鏡に向かって一心不乱に《万能陣》で魔法陣を描いていく。

僕の隣で様子を見ていたレミアアが首を傾げる。

「それは何の魔法陣なのですか？」

「ふふふ……【転移ゲート】の魔法陣だよ。この鏡を使えば王都にある別邸へ転移できないかと思ってる」

「転移……の魔法ですか？ 勇者サトウが健在の頃、勇者の仲間であった賢者タナカが用いたと言われている魔法ではありませんか。もうシオン様は何をされても私は驚きませんけど……」

何か悩ましそうにレミアアは大きく息をついた。

女神の言っていた通り、五百年ほど前に勇者とその仲間達が、魔王を討伐してエクストリア世界を救ったとされている。

その偉業を、この世界の人々は、遠い昔の神話として語り継いでいるのだ。

その勇者の名前がサトウ、仲間の賢者がタナカだから、女神が言っていた日本からの転移者が魔王を倒したというのは嘘ではないのだろう。

そんなことを考えながらしばらく鏡に魔法陣を描き続け、やっと【転移ゲート】の魔法陣が完成した。



それに魔力を流してみると——姿見の内側が歪んだゲートみたいになった。

これで王都にあるディルメス家の別邸に繋がっているはずだ。

王都の別邸には、昔行ったことがある。

そこにあつた大きな姿見を思い出して、この姿見とそれが繋がるように空間を繋げる、というイメージを試してみたのだ。

実は昔、《万能陣》の使い方を色々試していた時に、空間と空間を繋げる魔法陣を描いたことがある。

魔法陣が触れている空間を歪ませて、別の場所にワープできないか……というもので、ちょっとした小物なら通れる程度の転移ゲートを作ることに成功した。ちなみに、虫を使って生物も通り抜けるかの実験もしていて、成功している。

当時はスキルの理解度が低く、僕のイメージもあまり固まっていなかったもので、ここまでのサイズを描くことはできなかったんだ。

だけど今なら、きっと人が通れるサイズの魔法陣を描けるはず。

そう思って描いてみたんだけど……当時と同じ見た目だし、きっと成功しているだろう。

ちなみに、入口となる魔法陣を描けば、出口は思い描いた場所にできあがるという便利な仕組みである一方、一方通行なのがネックだった。

その仕様はおそらく同じだろうから、無事に向こうに着けたら、あつちの姿見にも魔法陣を描

かないとね。

ともかく、行ってみないことにはどうなるかわからない。

「ちよっと実験してみよう。鏡の向こう側へ行ってみようよ」

僕はそう言ったんだけど、すかさずレミリアが止めてくる。

「シオン様自身が実験されるなんて、それはダメです。私が確認して参ります」

「それじゃあ、二人で一緒に行ってみようか」

僕がそう言うと、レミリアはまた止めようと口を開いて……すぐに諦めた表情になった。

僕がこういう時、言い出したら聞かないことを彼女は知っているからね。

というわけで、僕とレミリアは互いの手を握り、ゲートの内側へと入っていく。

すると一瞬、上下左右がわからなくなり——次の瞬間には見知った部屋に立っていた。

ゆっくりと視線を動かすと、今まさに服を着ようとしている裸のアレン兄上と目が合う。

「ギャー！ シオンとレミリアの幽霊が出たー！」

「ワァー！ アレン兄上の幽霊が出たー！」

「二人とも冷静になってください」

ギャギャーと悲鳴をあげる僕とアレン兄上の頭を、スッパパンとレミリアが張り倒す。

レミリアは長く仕えてくれているから、これくらいのツツコミは日常茶飯事で僕も兄上も気にしない。

その衝撃で正気を取り戻したアレン兄上が表情を歪める。

「どうしてシオンがこの邸にいるんだ？ 詳しく話を聞かせてくれないかな？」

「……転移魔法陣の実験をしていて、デイルメス侯爵領の本邸から転移ゲートに飛び込んだんだけど……ここは王都の別邸だから、実験に成功したってことでもいいのかな？」

兄上もいるし、やっぱり見覚えのある別邸の部屋だ。

すると、兄上は目を丸くした。

「それは転移魔法を使ったということか！ こんな重大なこと、見過ごせないぞ、父上には報告したのか？」

「え？ まだですが……」

というか、人間の転移を試したのはこれが初めてだし、本当は報告に行くのも気が重かった。

父上が楽に移動できればと思いついて試してみたわけだけど、まさかあっさり成功するとは思っていなかった。

それに冷静になれば、転移なんてとんでもないことを実現させてしまったとなると、また父上が王都に報告をしないといけない事項が増えて、仕事を増やしそうな気がする。

そうなると、父上に叱られかねない。

「それじゃあ急いで報告しに行こう！」

「え、でもこちらからはまた魔法陣を描かないと」

「それじゃあ急いで描いてくれ！ 僕も準備するから！」

そう兄上に急かされて、僕は自分達が出てきた姿見に【転移ゲート】の魔法陣を描いていく。そして魔法陣が完成し、魔力を流すや否や、兄上が僕の腕を掴んでゲートに突っ込んでいった。

……兄上、転移は初めてだよな？ 未知の空間に飛び込むの、怖くないのかな？

無事に本邸の部屋に戻ってきた僕は、兄上に腕を引かれるがまま、父上の執務室へ向かった。

扉をノックしてアレン兄上が部屋の中に入ると、その姿を見て驚いた父上が椅子から立ち上がる。

「王都にいるはずのアレンがなぜここにいる？」

「それは、シオンがスキルで転移の魔法陣を完成させたらしく……」

「転移だど？ シオン！ どういうことか詳しく経緯を話さない！」

父上の迫力に圧されたアレン兄上が小声で答えると、父上はデスクを手のひらで叩く。

それから長時間、説教されることになったのは言うまでもない。

その後、やはり僕はめちゃくちゃ怒られた。

といっても、そんな危ない実験をして失敗していたらどうするつもりなのか、というものだったけどね。

それから、父上はしばらく悩んで、王城には転移ゲートのことは報告しないと決めた。

転移魔法は神話の魔法。本来であれば王城に連絡する必要がある。

しかし王城に知らせると騒ぎが大きくなりすぎるという理由と、実用段階に至るまで、色々と実験が必要になって大変という理由から秘密にしてみたんだ。

その日以降、幾つかの実験をして、転移ゲートについてわかったことは二つ。

一つは、ゲートは本来一方通行であって、僕が魔法陣を描く時にイメージした場所にしか繋がらないということ。

もう一つは、魔法陣——というか姿見よりも大きなものは転移できないということだった。

とはいえ、他の僕の魔法陣と同様、魔力を流すのは僕でなくても、効果は起動する。

そのため、兄上は頻繁に姿見の転移ゲートを利用することになった。

転移ゲートを作って一番喜んでるのは兄上のような気がするな……僕も兄上と気軽に会えるから嬉しいけどね。

第3話 宰相と面会！

転移ゲートの実験に成功してから二週間後、邸に王城からの早馬がやってきた。

父上の予想通り、ボーン食器の件で、ロンムレス宰相からの呼び出しがあったらしい。

王都とデルスの距離は、馬車で三日程度。

しかしその移動にもお金がかかるので、今回は転移ゲートで移動することになっていた。そんなわけで伝令を受けてから二週間後の、指定された日。

姿見の転移ゲートを潜くぐって、僕と父上は王都の別邸へと移動する。

「ではシオン、王城へ赴くぞ。王城に着いた後は、誰と出会うかわからん。くれぐれも粗相そそうのないようにな」

「わかりました」

「なに、ロムレス宰相は旧知の間柄で親しくしている。そう緊張するな」

この二週間、父上から王城へ向かうことになると言われていたけど、いざ王城の人に会うのかと思うと緊張する。

そして僕達は二人で別邸から馬車に乗り込み、王城へと赴いた。

城に到着した父上は、僕を後ろに従えて、宰相の執務室を訪れる。

部屋の中にいたロムレス宰相は、父上と同年代くらいだろうか、鼻の下にヒゲを生やした壮年の男性だった。

「よく来たな、デルメス卿……息子を連れてくるとは珍しいな。まずは座ってくれ」

「宰相閣下に呼び出されては来ぬわけにはいかんだろう。今回は次男を連れてきた。よろしく頼む」

宰相に勧められ、長いソファに父上と二人で座る。

対面のソファに座った宰相が使用人に声をかけ、何かを運ばせてきた。

宰相が使用人から渡されたのはマグカップ——ポーン食器だ。

宰相は手に取ってチラッと父上の表情を窺うかがう。

「これはある貴族からライオネル国王陛下に献上された、ポーン食器と呼ばれる器だな。どうやらデルメス卿の領都で購入した特産品らしいのだが、卿からは報告がない。なぜこのような良質な品を、卿は隠していたのだ？」

「別に隠していたつもりはない。最近、国境にナブラスト王国軍が現れてな。私は敵軍を迎撃するために砦に遠征していたのだ。その間に息子がポーン食器を考案し、家臣が領都デルスで売り出したのだが……ここまでの騒ぎになるとは考えてもいなかったのだ」

「では、この食器は貴殿の子息が作られたと？」

「そうだ。いい機会だと思ひ、その息子も同行させた。これが我が家の次男、シオンだ」

「シオンです。よろしくお願ひいたします」

父上に紹介された僕はソファから立ち上がり、ペコリと頭を下げる。

僕を見て大きく頷いた宰相は、父上に視線を移して目を細めた。

「考案者が貴殿の子息であることは理解した。これは要望なのだが、ポーン食器を王城に卸してくれないか。他国から来た外交官へ、我が王国の特産品として自慢したいと、ライオネル国王陛下が

仰せなのだ」

「こんな何の絵柄もない、ただ白いだけの食器を我が王国の特産品にするなど……ライオネル国王陛下も冗談が過ぎる」

「いやいや陛下は本気のようなのだ。このような質の高い食器を、我が王国の庶民までもが使っているのだと自慢したいらしい。元々、高品質の工芸品を使っている王城としては、頭の痛い話だかな」

宰相の話によると、王城で使用されている白磁の食器は重くて割れやすいので、ボーン食器と取り替えたいそうだ。

その後父上と宰相の話し合いで、王城で使用するのであれば、無地のままでは味気ないので、ボーン食器に金メッキなどで装飾を施すことになった。

そして僕が代表を務めるロンメル商会は、王室御用達という肩書きをいただけるという。

王室御用達の商会ともなると、商業ギルドにも影響を与えるほどの効力があるらしい。

ロンムレス宰相が僕を見て満足したように微笑む。

「シオンよ。これからもブリタニス王国のために新しい商品の開発に尽力するように」

「はい、わかりました」

僕がそう返事をする、父上が困ったように息をつく。

「あまり息子を焚きつけなくてくれ。最近は色々とやらかすので困っているのだ」

「頼もしい限りではないか。男子はそのぐらいでないと……そういえば、王都に卿の馬車が入ったという報告がなかったのだが、どうやってここまで来たのだ？」

そんな宰相の何気ない言葉に、僕と父上は顔を見合わせる。

別邸から王城に来れば問題ないと思っていたが、王都なのだから当然貴族の出入りを管理しているよね。すっかり忘れていたよ。

父上は、ここで誤魔化しても仕方ないと思ったのか、宰相に転移ゲートのことについて説明した。一応、僕の固有スキルであることは伝えつつ、偶然成功して領都の本邸と王都の別邸を繋げただけで、一人通るのが精いっぱい。しかもその後、別の転移ゲートを作る実験は全て失敗している。再現できていない、と父上は苦しそうに説明していたけど。

その内容を聞いて宰相は信じられない様子だったが、父上がそういう冗談を言うタイプではないので、どうにか納得してくれた。

まあ、僕のスキルつてのは信じてないみたいだね。

「このことが真実ならば陛下に報告しなければならんが……信じてもらえるだろうか……いや、ここは混乱を増やすだけなので詳細は伏せておいた方が……」

なんだか宰相の余計な心配事を増やしてしまったみたいだ。

「とにかく、この件は私の胸に秘めておこう。陛下への報告も、機を見て私からしておく」

そう言って溜息をつく宰相に見送られ、僕と父上は王城を後にして、別邸へ戻るのだった。

宰相との面会を終えた僕と父上は、別邸に戻るとそのまま領都へと戻った。

そして翌日、領都の邸の私室でレミリアと紅茶を楽しんでいると、扉が開いてアレン兄上が姿を現した。

「父上から聞いたよ。王室御用達の商人になったらしいじゃないか」

「僕が代表をしている商會がそうだったただだから」

「意味は同じだろう……それで次はどんな商品を開發するんだい？」

「え、考えてないよ？」

「王室御用達になったんだから、もっと色々な商品を作らないとまずいだろ。私も一緒に考えてあげるから、新しい商品のアイデアを出し合おうよ」

アレン兄上は真剣な表情だ。

「どうやら冗談ではなさそうだ。」

でもそう言われても、すぐに新商品のイメージなんて浮かばない。

僕とアレン兄上が頭を悩ませていると、レミリアが紅茶を上品に一口飲んで、テーブルの上にカップを置く。

「私の個人的な推測ですが、ボーン食器は無地の白色の食器なので、そのシンプルさが主婦層に受け、商品のヒットに繋がったと推測いたします。ですので、次も女性をターゲットにした商品を

考えてみてはいかがでしょう？」

「そういえば前世の日本でも、女性の心を掴んだ商品が大人気になるという傾向があったな。」

女性の好む商品……それなら美容に関係する商品がいいかもね。

そうなると洗顔用品、洗髪用品、香水……下着や衣服などだろうか？

僕は女性の好きそうな品を、簡単に説明しつつ挙げてみる。

「石鹼……香水……衣服……どれも魅力的な商品ですね。私としては衣服に興味があります」

「私は香水だな。香水は紳士の嗜好^{たしな}とも言うからね」

レミリアと兄上が、口々に言う。

「どれが売れるか考えるのは面倒だから、全て試してみてもいいかも。まずは香水から挑戦してみようかな」

そうなると、香水の作り方を考えないといけないよね。

たしか前世の記憶では、精油にエタノールを加えることで香水を作ることができるんだっけ。

でもこの世界には、エタノールなんては売られていない。

となると、まずは香水の素材となるエタノールを作る必要がある。

これは《万能陣》を利用すれば簡単にできるだろう。

次に香りの成分である精油だけ……

これも《万能陣》で作ればするけど、どんな香りにするかが問題なんだよな。

悩んでいると、レミリアが何かを思い出したようにウツトリした表情をする。

「ラバネス半島の森にはキラーパーンサーというヤマネコ系の魔獣が生息しているのですが、その毛皮は女性を虜にする独特な香りを放っているんです」

きつと彼女は、冒険者時代に狩ったことがあるのだろう。僕もどんな香りが興味があるな。

「それはいいね。レミリアの案を採用しよう」

「女性が好む香りなら、私も興味がある」

アレン兄上も乗り気のようにだし、キラーパーンサーの香水を作ってみよう。

レミリアには普段からお世話になっているから、彼女の好きな香水を作ってあげたい。

そこで僕はレミリアに頼んで、ジョルドを部屋に呼んできてもらった。

「ジョルド、至急で用意してもらいたいものがあるんだ。レミリアと二手に分かれて、準備してほ
ろ」

「今度は何事ですか？」

「ちよつと作ろうと思ってるものがあるんだ。大至急でキラーパーンサーの皮、それとアルコール純度の高い酒を調達してきてほしい」

僕の指示により、二人は邸を出ていった。

《万能陣》を使えば、色々なものを創造することができる。

しかし、何もない所から物体を生み出すことは苦手なので、イメージの元となる素材が必要とな

るのだ。

しばらく待つっていると、ジョルドが荷馬車に酒樽を積んで戻ってきた。

「これは『ドワーフの火酒』と言いまして、ドワーフが好む、アルコール濃度が非常に高く香りの癖も強い酒だそうです。これでよろしいでしょうか？」

「ありがとう、ジョルド」

「とんでもございません。しかしこんな強い酒を用意して何をされるんですか？」

「まあ、見て」

自室の床に羊皮紙を広げて、僕は《万能陣》のスキルを使って、【エタノール変換】の魔法陣を描いていく。イメージは、授業の実験なんかで使っていた、無水エタノールだ。

描き終えたところで、ドワーフの火酒の酒樽を魔法陣の上に載せて、魔法陣に魔力を流す。

すぐに魔法陣が輝き出し、酒樽の中でポコポコと音がし始めた。

魔法陣が問題なく発動していれば、エタノールへと変化したはずだ。

樽に顔を近づけて匂いを嗅ぐと、元の独特な癖のある匂いは消え、大昔に嗅いだ記憶のある、アルコール臭になっていた。

おそらくこれでいいはずだ。

アレン兄上がアルコールの臭いに鼻をつまんで顔をしかめていると、部屋の扉が開き、レミリアがキラーパーンサーの毛皮を持って帰ってきた。おそらく冒険者ギルドに行って購入してきたのだ

ろう。

ドサツと目の前に置かれた毛皮からは、じゃ香に似た香りが漂ってくる。

毛皮から匂いがするという話だったから、毛皮のどこから匂いがするのか確認しようと思ったんだけど……ちよつとわからないな。

まあ、あとは《万能陣》で何とかできるだろう。

僕は羊皮紙に《万能陣》で、【香りの成分抽出】の魔法陣を描く。

そしてその上に、キラパンサーの毛皮を入れた樽を載せる。

魔法陣に手を添えて魔力を流すと、樽の中で何かが回転しているような震動が伝わってきた。

それが収まったところで樽を上から覗き込むと、液体が溜まっていた。

固体から精油成分を分離させても、残りの固体成分をどうするかイメージが湧かなかつたので、まずは一度、全て液状にする効果にした。その後、その液体から精油になる成分を油状にして分離させて、水の上に浮かせる方法を試したのだ。

指を上澄みの液体に浸け、匂いを嗅いでみると、じゃ香のような独特な香りがした。

うん、成功だな！

この表層部分だけを汲み取れば、キラパンサーの香り成分を抽出した精油の完成だ。

それから、僕の指示に従ってレミアアはスプーンを使い、エタノールの樽と精油の樽から少しずつ液体を取り出し、口の開いた瓶の中で調合を始める。

何度か失敗しながら試行錯誤を繰り返し——そうしてようやく、彼女好みの香水が完成した。

こういう香水の調合って、男の子である僕にはちよつと難しい。

女の子の好みの香りってわからないから、レミアアに手伝ってもらって助かったよ。

完成した香水を移し分けた瓶に顔を近づけ、アレン兄上がクンクンと香りを嗅ぐ。

「ほう……これがキラパンサーの香水か。独特の香りだが、確かに癖になる香りだね」

僕達の作業を見ながら説明を聞いていたジョルドも、興味津々な様子だ。

「女性が好まれる香りですか。これは私も試してみないと」

ジョルドは香水の小瓶を片手に持ち、もう片方の手のひらの上に香水の液を出して、ガバガバと首や手に塗り始めた。

その様子を見て、レミアアは残念そうな目でジョルドを見る。

「そんなに香水をつけては臭くなりすぎます。それでは逆に女性に嫌われますよ」

二十代後半になるジョルドだけど、若い頃から長年ディルメス侯爵家に仕えているので、女性との出会いがない。

なのでレミアアの言葉に、とても慌てて、ハンカチで香水を拭き取っている。

……この香水で、少しでも女性と仲良くなればいいけど。

そんな二人を見ながら、できあがった香水の瓶を手に取って、アレン兄上が僕に問いかける。

「これ、何本か貰っていいかな？」

「誰かにプレゼントするんですか？」

「ああ。貴族学院の女子達に配ってみようと思ってる。もし気に入ってもらえたら、顧客が増えるじゃないか」

「なるほど、ありがとうございます。ぜひ感想を聞かせてください」

アレン兄上は王都にある貴族学院に通っている。

貴族学院には大勢の貴族の子息が、勉強のために集まってきているから商品の宣伝には丁度いいかもね。

キラールパンサーだけでなく、色々な植物や花からも、色々な香水を作ってみたいな。

香水を作る実験に成功した翌日、今度は石鹼を作ることにした。

石鹼の作り方も、香水同様に前世の記憶にある。

動画を見たことがあって、油と苛性ソーダ水溶液などの強アルカリ溶液、精製水、それから香りづけに精油が必要だったはず。

ただ、苛性ソーダ水溶液の作り方なんかは知らないで、別の動画で見た、灰を使った作り方を参考してみよう。

いずれにしても、僕の《万能陣》のスキルがあれば簡単に作ることができるだろうしね。

今回もレミリアとjordに頼んで、素材となる油や灰を用意してもらおう。

精油は……とりあえず今日はなしで作ってみるかな。

二人が出かけている間に羊皮紙を床に置いて、《万能陣》のスキルで、【石鹼】の魔法陣を描いておいた。

二時間ほどでレミリア達が戻ってきたので、早速素材全てを一つの樽の中に入れ、その樽を魔法陣の上に載せる。

そして魔法陣に手を添えて魔力を流すと、魔法陣が眩い光を放って、樽の中の素材が変化し、石鹼が完成した。

石鹼を手に取り鼻を近づける。

何の香りもしないから、清潔感のある香りや、女子が喜ぶ香りを石鹼に追加した方がいいかも。

それにしても、詳しい科学的な作り方なんてわからなくても、こうして完成するなんて、やっぱこのスキルはチートな気がするな。

翌日、香り付けした石鹼を試してみるため、僕は邸の浴場へと向かった。

このエクストリア世界では、お風呂に入る文化が浸透していない。

一般庶民は布を水に浸して体の汚れを拭うだけだ。

元冒険者ってことで、町の暮らしにも詳しいレミリアに聞いた話だけど、なかなか汚れが落ちないので、苦労している人も多いんだとか。